

公益財団法人 檜の芽会 御中

令和6年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】	① 作成日			令和7年4月20日	
②法人・団体名	鶴が丘一丁目町内会				
③団体所在地 (都道府県・市町村名まで)	宮城県仙台市				
④責任者氏名	森本 修	(役職名等)	会長		
⑤担当者氏名	岡村恒男	(役職名等)	総務委員長		

【奨学活動の概要】					
⑥助成交付決定番号	R06-022	⑦助成金額	50万円	⑧申請カテゴリー	B
⑨奨学活動名	外国ルーツ等子ども達の進学を応援する学生とのコミュニティ・チャレンジ活動				
⑩主な実施場所名・及びその住所	宮城県仙台市・鶴が丘コミュニティセンター（仙台市泉区鶴が丘1-37-1） 鶴が丘一丁目集会所（仙台市泉区鶴が丘1-5-18）				

⑪活動内容とその成果の概要（詳細は【様式3-2】又は別添資料にて記載・説明ください。）

- ・当活動は基礎学習が身に付いていない外国ルーツ等の中学生を対象に地域住民と学生とによる伴走型の学習支援を行うもので、身近でアットホームな学習環境を創りながら次の3つの活動を主に実施した。
 - ① 平日の放課後、集会所で行うお茶の間学習教室に当該中学生を招き、小学生・大学生・地域住民が身近に寄り添って漢字の読み方や計算の仕方など小学生期に立ち返った基礎学習を繰り広げた。
 - ② 教える人が居ない家庭でも学習できる環境として、小学校5教科をオンラインで学べるタブレット教材を購入し、マイペースで継続的に幾度も行い学習習慣として身に付く反復学習を押し進めた。
 - ③ 休日や夏冬春休みにコミュニティセンター等を借り、大学生・地域住民と共に進捗具合を確認し、中学教科をスタート時から学び直し、今後の進学意欲を掻き立てる底上げ学習を実施した。
- ・成果としては、日本に来て漢字も読めず授業にも付いていけずに学習が滞りがちの中学生に対して
 - ・学校以外の身近な地域場で、兄弟のような家庭的な雰囲気でもマンツーマンの学習が実現できた。
 - ・小学期に学ぶ漢字も算数も復習でき、中学校の宿題も問題文が分かるまでの基礎力が体現できた。
 - ・中学で教わる社会・理科も改めて再学習でき、得意な英語を伸ばそうとする学習意欲も芽生えた。

⑫奨学活動の定量的把握（注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑪及び様式3-2等でご報告願います。）

支援対象	延べ人数 (A:人)	平均時間 (B:時間)	活動量 (A×B)	備考・補足・計算根拠等
中学生等	360人	2時間	720	学園ルーツ中学生/@2人/回×5日/週×4週/月×9ヶ月×2時間
高校生等				
大学生等	110人	2時間	220	学習支援大学生:@2人/回×55回×@2時間
学習支援員等	83人	2時間	166	地域住民:@1.5人/回×55回×@2時間
その他	60人	0.5時間	30	お茶の間教室小学生:@2人/回×30回×@0.5時間
合計			1,136	

⑬その他の定量的な数値（任意） 特になし

令和6年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施詳細報告書

奨学活動名：外国ルーツ等子ども達の進学を応援する学生とのコミュニティ・チャレンジ活動

法人・団体名：鶴が丘一丁目町内会

作成者 氏名：佐藤和

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

【課題】

当地域では、子どもの7人に1人が貧困という社会問題をきっかけに子育て家庭の小学生応援活動として、地域住民と大学生による独自の放課後教室を繰り返してきた。しかし学習塾ではないため習熟度が上がらぬまま中学を迎えたり、近年では基礎学習の乏しい外国ルーツの児童達の当地域への転居も見られ、彼らが学力不足の状態中学校の教室授業を受けても、勉強が分からないままに日々を過ごし進学も見込めない危惧される状況に直面しかねない問題を抱えている。

【目的】

このような問題に対しコミュニティ・スクールの観点から地域も関わった取り組みは必要であり、今回の活動はこれまで積み上げてきた「お茶の間学習」を新たに一步踏み出し、学力水準の達しない中学生の基礎学習と学びの再建を身近に応援し、勉強が理解できることで中学生活を楽しく過ごせ、進学についても希望が持てる学童期ならではの環境づくりへの一助となることをめざしている。

【実施内容】

活動内容としては、基礎学習が身に付いていない外国ルーツの中学生を対象に、集会所等を活用し当地域で行う「お茶の間学習」の雰囲気を取り込みながら、地域住民・学生等と一緒に交流し合えるアットホームな環境を創り、身近に寄り添って漢字や計算などの基礎を一から学習でき、中学教科もマンツーマンで教わり、学習の底上げを図る伴走型の支援活動を継続的に実施する。7月から開始し、平日週2回の放課後、休日土曜午後や夏冬春休みを活用して順次実施する。

2. 実施した奨学活動の詳細

【開催に向けた準備】

採択後の6月から学校と意見交換し、外国ルーツの中学生2名（中1・2年生）を当面对象とし、学校や家庭でもない第3の居場所として集会所やコミュニティセンターの予約を取り、地域住民や大学生等に声を掛け参加メンバーを招集するなど7月からの奨学活動に向けた準備を整えた。

【集会所での放課後学習】

7月開始と共に平日の奨学活動として、町内の一丁目集会所において放課後学習をスタートした。小学生を対象に毎週火曜・木曜日に開催しているお茶の間学習教室に外国ルーツの中学生を招き、小学校の勉強を一から始める形で国語・算数中心の基礎学習を大学生等と一緒に繰り返した。漢字は日本に来て初めて目にするので、読み方・書き方は勿論、漢字の意味も周りの小学生や大学生・地域の人から声を掛けて教えてもらうことから始まった。算数計算も掛け算・割り算の仕方をノートに書いて教わるなど、兄弟姉妹のようなお茶の間感覚での和やか雰囲気での学習を積み重ねた。本人達が部活等で集会所に来る時間が遅くなる時には、大学生も居残って隣の和室で遅くまでテーブルを囲んで勉強し、基礎学習を跡切れさせない指導をマンツーマンという形で続けていった。





【家庭でのオンライン学習】

集会所の放課後学習はドリルを使った対面活動が主であるが、火曜・木曜の限られた時間帯で特にクラブ活動が長引き週2回の本人達の参加が難しくなるにつれ、基礎を学ぶための十分な時間確保が困難となった。そのため10月からは予定に無い新たな学習方法も取り入れ、お茶の間教室に立ち寄りなくとも家庭でも出来るオンライン学習を始めることになった。小学校の教科が画面を介して勉強できるタブレット教材を購入し、毎月々に新たな教材ドリルが順に送られ、大学生・地域住民が傍に居なくても自分達の生活ペースに応じて時間を気にせずいつでも学習できる環境が補充された。分からない所は画面を見ながら何度でも繰り返し反復し学習できるメリットも発揮され、基礎学習を家庭でも毎日のようにコツコツと継続できる幅広い活動として推し進めていった。



【コミセン等での休日学習】

休日土曜日や夏冬春休みには、コミュニティセンターなどの新たな部屋を確保し、たっぷり時間を取りロングランに及ぶ学習を繰り広げた。教える側も学習指導経験のある大人や学校教師をめざす大学生が中心となって集中的な学習を徐々に高めていった。始めの夏頃はドリルやボードを使った個別指導を重ね、秋頃からは自宅で行うオンライン学習についてタブレットを使ってその進捗度を確認しながら、小学校の基礎学習のレベルアップに励んでいった。休憩をはさんだ後半には、中学校教科についても勉強する時間を設け、学校から出された宿題について一緒に見たり読んだり考えたりしながら、中学校で行っている授業内容を改めて学び直し、分からないままにスルーしない習慣を身に付けていった。他にもコミュニティセンター以外で中学校の空き教室や空き時間を活用したり、大学生が鶴が丘まで来る時間的ゆとりが無い時には反対に中学生が街中に出向いてサテライトで勉強できる公共施設の交流スペース（アエル・エルソーラ）を活用するなど、学習する本人達の気分転換も考えながら飽きずに勉強を重ねていける休日の環境づくりにも力を注ぎ、意欲を持って取り組める体制を創り出していった。



【学習のリフレッシュ活動】

長期間にわたる学習に及ぶことから学習の合間にリフレッシュを兼ねた体を動かす活動も行った。町内会が繰り出す季節ごとの地域活動に参加し、他の児童と一緒に野菜収穫や落葉清掃を体験し、スポーツ大会の駅伝に出場するなど室内の勉強だけではないアウトドア活動も大いに楽しんだ。お茶の間学習教室で顔を合わせる小学生や地域の人とも一緒に交流でき、海外から来て顔見知りが少ない不安な環境を払しょくするコミュニティ交流を通じ、勉強への意欲向上をもたらせた。



【活動回数・参加人数等】

学習活動の開催回数は7月のスタート以来、集会所でのお茶の間学習が30回を数えた。中学校のクラブ活動の影響で集会所に足を運べたのは全体の半分であったが、土曜日曜の休日学習を15回、夏冬春休み中の休日学習を10回それぞれ行うことができ、7月から期間中の2割に当たる55回（＝55日）にわたって対面での学習を行うことができた。教室が無い日には家庭でのオンライン学習を加えると、毎週ほぼ継続的に学習できる環境を提供することができたと考えている。参加人数も地域住民・学生・小学生を合わせて計30人が随所において関わった。地域の声掛けで学習指導経験のある住民や大学先輩からの呼び掛けで学校教師をめざす教育学科の学生達が順々に足を運び、6名の専門スタッフとしてマンツーマンでの指導に逐次参加した。応援ボランティアとしても東北学院大学や仙台白百合女子大学などから10名に及ぶ学生達も随時参加し、お茶の間学習に来る10名の小学生と一緒に傍らからの中学生への温かな学習応援を重ねてくれた。

活動回数			活動参加人数		
お茶の間学習	7月～3月 (中学生参加)	(全体60回開催) 30回	事務局スタッフ	3人	地域住民
			学習専門スタッフ	6人	学習指導経験者・教育学科学生
休日学習	土日曜	15回	学生応援スタッフ	11人	東北学院・仙台白百合等
	夏冬春休み	10回	応援小学生	10人	お茶の間教室
計		55回	計	30人	

3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

- ・困っている子ども達を身近に応援するお茶の間学習からの試みであるが、学生達・住民との連携を重ねることにより学校外での中学生への学習支援に繋がる地域活動としての成果が得られた。
- ・小学生と共に基礎学習を一から学ぶ機会が得られ、地域住民・大学生からも家族や兄弟のような親しみを持って教わることができホームシックにならず楽しく勉強に励む習慣が身に付いた。
- ・課題としては、オンライン学習も取り入れたが未だ1年に満たないため小学校高学年レベルを十分にマスターする段階までには至っていない。そのため対象中学生の弟・妹共々引き続きお茶の間学習中心の奨学活動を継続させると共に、外国ルーツの中学生自身も今回の地域や大学生からの身近な支えに応える形で将来に向け意欲的に取り組んでいくパワーアップを図っていく。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

- ・外国ルーツの中学生にとっては漢字を読めないことで学校の試験問題の質問内容も掴めずに居ることが分かり、読み仮名をふることで学習への姿勢も一気に変わり、学力アップの転機になった。
- ・大学生と得意の英語を学び中学後の経験談を聞く内に、将来を考える気持ちも徐々に芽生えた。